

# ABIC 国際社会貢献センター

# Information Letter

No. 11 2004年11月

## 海外での活動

ODA 関連	インドネシアでの中小企業支援活動	2
	サモア環境省での支援活動	3
	メキシコで日本語を教える	4
	脚光を浴びるGMSに3人の会員が派遣される	5
海外便り	〈上海発〉あれが東海大橋	7

## 国内での活動

自治体への協力	中小企業支援活動—地方自治体への協力	8
中小企業支援	技術とアイデアのF社の中国業務を支援して	8
外国企業支援	在日外国大使館あれこれ	9
教育	大学・オープンカレッジでの講座	10
	外国為替講座雑感	10
	青山学院大学向け「国際ビジネス関連講座」	11
	小中高校向け講師派遣グループ便り	11
	東京都の先生に対する研修会	11
	ある留学生の「国際理解教育の授業」から	12
関西での活動	真夏の熱い英語教育研修会	13
留学生支援	留学生支援バザー実施	14
その他の活動	2004年日本英語交流連盟大学対抗ディベート大会に参加	14

---

事務局便り	ABIC懇親会開催	15
	2004年度非営利組織インターンシップ(学生実習生)受け入れ	15
	「高齢者雇用フェスタ2004」に出展、NHK教育テレビ『土曜フォーラム』に登場	15
	ABICインフォメーションレター発行費用支援および賛助会員登録ご協力依頼について	15
	新入会員のお知らせ	16
	会員入会のお願い	16
	「陽佑ちゃんを救う会」の募金額達成のお礼	6

---

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC) <http://www.jftc.or.jp/abictop.html>

〒105-6106 東京都港区浜松町2-4-1

世界貿易センタービル6階 (社)日本貿易会内

Tel : 03-3435-5973 Fax : 03-3435-5979

e-mail : mail@abic.or.jp

【関西デスク】

〒552-0021 大阪市港区築港2-8-24 pia NPO 4階 413号室

Tel & Fax : 06-4395-1188

e-mail : kansai-desk@abic.or.jp

## インドネシアでの 中小企業支援活動

JICAシニア海外ボランティア  
北スマトラ州政府商工総局アドバイザー

いしかわ きよし  
石川 清 (元丸紅)



昨年4月に当地北スマトラ州メダン市に赴任し1年半になる。メダン市は人口200万、インドネシアでは3番目に大きく、スマトラ最大の商業都市である。

小職の指導科目は「中小企業マーケティング」ということだが、配属先の商工総局長からは具体的業務目標として当地の農水産物資源を取り扱う企業に経営コンサルタントとして輸出促進と経営活性化の支援を要請された。また、理論、理屈よりも実践、成果を尊ぶスマトラ人気質を尊重し、企業の求める商品開発、輸出促進、売上向上などの成功例を示して欲しいとも言われた。さらに、それらのモデルケースを他の企業にも開示すると同時に商売経験の乏しい商工総局300人の役人にも分かりやすく経営改善手法をセミナーで指導して欲しいと要請された。

### 豊かな農水産資源と実務業務

当地事情を知るに従い、JICAは小職に最適な赴任地を選んでくれたと思った。当地の農水産物資源は極めて恵まれており、その豊かさはアジア諸国で最大級である。現役時代、農水産物、食品など世界各国からの開発輸入業務を長年経験したが、その経験を生かせる場所であると改めて認識した。

実務の一例を紹介しよう。メダン市の南部60kmから広大な高原地帯が広がる。標高800~1,300mで年中平均気温が15~25度で、しかもインド洋からの湿った気流が定期的な降雨をもたらし、肥沃な火山灰に覆われた当国最大の果物、野菜の産地となっている。中央部のトバ湖の豊富な水量を利用してアサハーン・ダムから54万kwの電力が供給される。

日本から各種野菜の種を輸入し、それを1,000haの契約農家に販売してきた作物を全量加工企業が買い



日本の大手スーパー向け「大学芋」。さつま芋を粗切りにしたもの約6分油揚げし、その後クーリング(冷ます)→袋詰め→急速冷凍加工



日本の大手スーパー向けおでん大根輪切り加工作業。大根の厚みも直径も均一に輪切り作業する。輪切り→煮沸→袋詰め→箱詰め(酢液詰めしているので常温で輸送)

取るシステムを構築。ほうれん草は種を蒔いて35日後収穫、大根は50日、さつま芋、牛蒡は5ヶ月で年中栽培可能であり、しかも堆肥作りに長けているバタック人農家は農薬をほとんど使わない。昨年の毎月の船積み出荷数量は、大学芋80トン、ほうれん草100トン、おでん用大根200トンなど年間5,000トンを対日輸出した。

他の作物ではパーム油、ゴム、ココナツと3大プランテーションがある。コーヒー、カカオの他、ドリアン、マンゴスチン、パイナップル、パパイヤなど当国最大の果物産地で輸出向け加工を検討している。

水産物では各種エビ、カニ、チリメン・ジャコの原料が年中漁獲できる。これまでにこれらに関与する120企業から相談を受けた。その中から現在15企業に絞り、輸出実績拡大に向け支援している。



チリメン・ジャコの加工作業。日本と同じレベルで稚魚煮沸→乾燥→機械サイズ選別の工程の後、チリメン以外に混入しているエビ、カニ、稚魚の稚魚を手作業選別。当地安価な女工賃金で細かい作業も可能

## 今後の業務課題

当州の輸出金額は2001年22.9億ドル、2002年28.9億ドル、2003年31.5億ドルと順調に増加している。ほとんどが農水産物原料であり、将来の輸出拡大には高付加価値化、完成品加工輸出が必要である。そのためにはインフラの整備と海外企業誘致のための環境整備が必須であるので州政府に薦めている。州政府も輸出促進第一主義の政策を採用しており、その第一弾として、各企業の貿易実務能力を向上させ経営改善に資するため2004年4月に貿易研修センターを完成させた。JICAは同センターにパソコンなどIT機器を寄贈した。このセンターの一室に小職の事務室を移動し、各企業の相談に対応している。

JICAはこの8月に果物、野菜、香辛料取り扱い企業から15名をマーケット研修のため日本に招聘した。この研修の予備知識指導支援のため日本の市場流通のセミナーを実施した。また10月にはそれ以外の業種から20名を同じく招聘しそのための指導支援を行った。その結果、各企業の輸出意欲に弾みがついてきた。



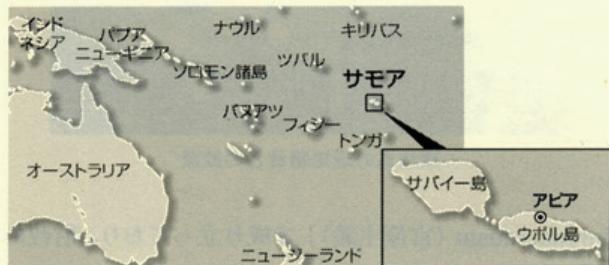
州政府の前で当地支援企業の若手と。JICAがマーケット研修として日本に数社を招聘。出発前に州政府知事を表敬訪問し出発の挨拶に同行した帰り（筆者：左から2人目）

当地の輸出企業の多くは福建省出身の華僑で、当地に着任後毎週日曜日に華僑の昼食会に誘われ家内と共に参加している。家族単位で交流しているお陰で幅広い情報交換ができる。当地はスマトラの表玄関として多民族の埠場であり、5大宗教が共存共栄している。歴史学者アーノルド・トインビーの言葉を思い出す。「もしまた生まれてくることができるならば、多様性、多民族に富んだ刺激的な交流ができるシルクロードに生まれてきたい……」。当地はマラッカ海峡に面する南のシルクロードの代表的な町である。JICAの仕事を感謝するとともに誰彼なく多くの人と仲良く交流し、多少でも国際社会に貢献したいという密かな個人目標のためにも、残り半年を全力投球したいと考えている。

## サモア環境省での支援活動

JICAシニア海外ボランティア  
サモア環境省廃棄物減量化アドバイザー

しだ まさゆき  
志田 正幸（元住友商事）



住友商事を準定年退職後、JICAとの関係が今日まで継続している。退職後、JICA専門家としてバーレーン環境省の要請で同国との包括的環境基準の作成、ならびに廃棄物総合管理システムの構築を目的に1999年から2001年の2年間派遣され技術指導を行った経緯がある。今度は、JICAシニア海外ボランティアに応募し採用され、2003年から2005年の2年間、サモアの環境省に廃棄物減量化対策のアドバイザーとして派遣され今日に至っている。

サモアに赴任して1年6ヶ月になり同国ならびに担当業務内容を紹介したい。サモアは南太平洋に位置する島国で民族的にはポリネシア人であり、人口は約17万6千人、総面積2,934km<sup>2</sup>（島根県より若干小さい）、年間平均気温は24~28°Cで乾期と雨期に分かれている。年間雨量は約3,000mm、当国最大の島サバイー（SAVAII）島および首都アピアのあるウポル（UPOLU）島には、在留邦人80余が居住している。1962年に南太平洋諸島で初めて独立を達成した若い国である。

サモアに限らず南太平洋諸島はMIRAB〔Migration（移民）、Remittance（出稼ぎ送金）、Aid（援助）、



「環境日」にコンポスターを展示

## 海外での活動



環境省の現地職員との歓談

Bureaucratism (官僚主義) で成り立っており、財政的に他の国への援助を期待している。サモアの例を紹介すると、日本の資金援助によりサモア国立大学、職業訓練学校、小・中・高校の数々、国際飛行場施設、港湾施設、南太平洋環境総合施設内トレーニング・センター、病院等が建設され、またそれら施設の管理運営を目的として、シニア海外ボランティア、青年海外協力隊員が派遣され、各種支援を行っている。

サモアの廃棄物管理は、環境省の一部署である都市計画管理公社 (Planning & Urban Management Agency) の管轄下で行われており、一般廃棄物の収集・運搬は業者に委託して行っている。処分は埋立方式であり、一般廃棄物は分別が行われておらず家庭から排出されるあらゆる物が含まれている。

廃棄物の減量化対策として、同国に受け入れられ、かつ実効性が期待できる方策を現地職員と協議した結果、廃棄物中に占める有機性廃棄物（台所から出る食材残渣、伐採草木等）のコンポスト化、ならびに空き缶のリサイクル化を図るべく企画し、現在実践を行っている。

空き缶のリサイクル推進に関しては、昨今の食生活の向上で輸入缶詰食品・飲料品類が増え、空き缶の排出量が増加しており、廃棄物中に占める容積が大きいため廃棄物の減量化対策として空き缶のリサイクルを企画した。必要機材（プレス機械、磁力選別機等）の導入を行い、今年度末にはサモアで初めてのリサイクルが開始される予定である。機材の購入は、JICAの資金援助によりニュージーランドの機械メーカーから調達を行うことで現在進めている。

プレス梱包されたアルミ缶、スチール缶はニュージーランドもしくはインドネシアの再生業者に売り渡す方向で取り進めている。アルミ缶の売却利益は得られるが、スチール缶は市場価格が安く、輸送費等を差し

引くと赤字となり、この取り扱いに課題が残っている。

長い中東生活の後、緑豊かな常夏の島サモアで仕事、生活ができるることは楽しみでもあり、得がたい経験と思っている。

## メキシコで日本語を教える

JICAシニア海外ボランティア  
日本語教育指導

ひろせ のぶお  
広瀬 暢男 (元 伊藤忠商事)



2003年7月JICA (国際協力機構、旧国際協力事業団) のシニア海外ボランティアとして日本語教育のためメキシコに派遣され、当地の日本語学校で日本語の教育指導をしている。

私の仕事は、日本語学校の運営・管理についての指導や助言である。具体的には、①学校運営のための指導、②指導要項・コースデザイン・カリキュラムの作成・指導、③教材・テキストの作成・整備、④現地教師の研修指導、⑤日本語授業担当など。私の派遣先は、アメリカ・カリフォルニア州と国境を接するメヒカリ市にある日系人協会が経営する日本語学校「CENTRO DE IDIOMAS DE MEXICALI, A.C.」である。(メヒカリはかつて有名な棉花の産地で、伊藤忠や丸紅などの日本企業が事務所を置き駐在員を派遣していたことがあるのでご存知の方も多いと思う)

この他に、エンセナダ日本語学校やティファナ日本語学校の2校を週1回巡回して指導している。巡回とい



授業風景 (ティファナ校)



ティアナ校の生徒たち

ってもメヒカリからエンセナダまでは300kmあり高速バスで4時間、メヒカリからティアナまでは200km、同じく2時間半かかる。メヒカリ校、エンセナダ校、ティアナ校合わせて約150人の生徒（約80%がメキシコ人、20%は日系人）が熱心に日本語を勉強している。

メヒカリ校には他にJICA青年ボランティアの女性教師とメキシコ人の男性教師がおり、私を含めて3人の教師が合計週50時間余りの日本語授業を担当している。生徒数は約80人（80%メキシコ人、20%日系人）で、小学生の子供から中学・高校生、大学生、社会人、主婦と幅が広く、テキスト選びや教え方に苦労している。われわれ二人の日本人教師は授業以外にも学校運営に関する助言や年間計画、時間割作成、テキスト・教材の準備など様々な学校業務をしなければならない。

エンセナダ校は、日本から采ている専任の女性教師が学校関係全般をみているので、私は週1回火曜日に主婦5人の生徒に2時間の授業を担当すればよい。

ティアナ校は、これまで正式な日本語校として活動しておらず、私の仕事はまず開校準備から始めたことであった。教室、付帯設備などは日系人協会のものをそのまま使用できたが、年間計画、カリキュラム・時間割作成、クラス編成、テキスト教材の選定・作成などに約3週間程費やした。約40名の生徒が集まり、授業時間は水曜日、木曜日各2クラス、合計4クラス（計8時間）とし、私一人が担当することになった。生徒は7歳から大人までで日本語のレベルも平仮名も読めない者から1年ほど日本で勉強したことがある者まで様々で、クラス編成やテキスト選定に苦労した。ともかく昨年9月第3週よりスタートし、現在も30人のメキシコ人と10人の日系人が日本語を勉強している。

私がなぜ日本語教育に関わるようになったのか、またなぜメキシコまで行くようになったのか、それは日本語が好きだということと商社にいて、海外との仕事

の中で異文化に接し、日本の良さを再認識していたからだと思う。そして、それを60歳以後の自分のライフワーク、生き甲斐としてどう具体化しようかと考えていた時、このJICAプログラムに出会い、応募の結果採用され派遣されたからである。

メキシコで日本語教育に携わって1年が過ぎた。私の任期は来年7月まで後1年弱ある。引き続き日本語教育を通じて、メキシコの人達に日本語の素晴らしさや日本の文化、そして日本人の心を正しく伝えていくこと、それが私の役目ではないかと思っている。

## 脚光を浴びるGMSに 3人の会員が派遣される

GMS (Greater Mekong Sub-region) と略称されるメコン河流域6カ国（タイ、ベトナム、カンボジア、ラオス、ミャンマー、中国雲南省）は種々の共同計画を推進するために官と民それぞれが協議を進めてきた。一歩進めて2000年末に6カ国共同商工会議所と言ったGMSBF (Business Forumの略) が結成され、活動



を開始している。各国の利害が一致しない事項も多く、紛糾曲折があるが、大局的に捉える場合、国ごとの発展に限らず地域としての発展が不可欠のことと理解されている。

一方、GMSの動向は日本にも多大の影響があるため、その重要性を認識する日本政府、特に経済産業省およびJETROは同地区に注目し種々の施策を打ち出している。

最初に、GMSBFの実態を把握し、日本はどう対応すべきか検討するので、調査のため適任者を推薦するようJETROよりABICに対し要請があった。候補者3名の中から中村恭紀氏（元日商岩井）が選ばれ、2003年10月～12月にかけ6カ国を巡回し精力的に調査を行い、リポートを提出した。

6カ国の中で発展著しいベトナムは別途調査する必要があるとのJETRO判断より、裾野産業調査のために調査員を出すことになり、ABICに同様の適任者推薦の

## 海外での活動

要請があった。結果として市川匡四郎氏（元三菱商事）が選ばれ、2004年2月～3月調査を実施した。市川氏は調査終了後レポートを作成すると引き続きJETROのハノイ駐在員となり、現在も活躍中。

次いで、上記中村氏のレポートを検討の結果、JETROはGMSBFの活動や運営に協力するためアドバイザーを派遣することを決定、同じく適任者の推薦依頼があった。ミャンマー駐在が長かった小泉清司氏（元大丸興業）が選ばれ、目下主としてビエンチャンに滞在し、適宜6ヵ国を訪問しつつ活動している。GMSBFの事務所は地理的にGMS地区の中心であるラオスのビエンチャンにある。小泉氏の活動期間は2004年末までであるが、日本からのアドバイザー派遣は継続されると思われる。

2004年に入り、経済産業省の委託を受けたJETROは「先導的貿易投資環境整備実証事業」を選定し、日本企業の事業を援助する方策を打ち出した。応募した民間の36事業計画の中から第三者審査も取り入れ10計画を選定した。応募した計画の中にもともとGMSに関連するものが多かったが、結果として採択された10計画のうちの6計画が広い意味でGMSに関係している。官民ともGMS地区に注目している証であり、今後も同地区の発展が期待されている。

また、アジア開発銀行が注力している各国を結ぶハイウェイが完成する際は、さらにGMS各国間の交流が拡大すると予想される。雲南省からラオス経由タイ国を結ぶ南北回廊、ミャンマーからタイ国、ラオスを経てベトナムにいたる東西回廊、そしてバンコクからプロンペンを経てホーチミンにいたる南部沿岸回廊があり、東西回廊は2年後に貫通する。

GMS対象ではないが、海老原茂氏（元トーメン）は、関本喜茂氏（元トーメン）の後任として7月に2年の予定でカンボジア商業省アドバイザーとしてJICAから派遣された。海老原氏は、2003年秋までラオスの総理府アドバイザーとして3年間派遣されており、帰国後半年の充電期間を経て、今度はカンボジアに赴任した。同氏は現役時代ラオス・カンボジア両国の駐在員であった。国別アドバイザーとGMSBFアドバイザーは補完関係が出てくるであろう。

中国集中のリスクを避け、そのカウンターバランスの役割もあることからGMS地区の総合的発展が期待されている。日本の注目度も高まり、それにつれてABIC会員の活動の場が増えるものと思われる。

(メコンデスク担当コーディネーター 吉川 和夫)

## 「陽佑ちゃんを救う会」の募金額達成のお礼

生後5ヵ月で小腸の全部と大腸の一部を失った陽佑ちゃん（ようすけ（株）トーメン・サンチャゴ駐在員事務所長の大橋之歩さんご長男7ヵ月）が米国で小腸移植手術を受けるための募金活動を、ABIC会員（メール会員）の皆様にご紹介しましたが、このたび「救う会」より、目標額達成の報告と御礼がありました。

『多くの皆様のご支援、ご協力により、11月9日、募金が目標額を超える1億1,000万円に達し、心より御礼申し上げます。陽佑ちゃんの体調悪化に伴い、ジャクソン記念病院へ11月19日入院し、小腸のみの移植から肝臓、胃、すい臓の4臓器の多臓器を一度に移植することになります。今後の陽佑ちゃんの状況は引き続きホームページで案内させていただきます。皆様、本当に有難う御座いました。

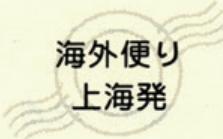
「陽佑ちゃんを救う会」事務局代表・諸橋正己 HP：<http://yosuke-chan.web.infoseek.co.jp/>

**e-mailアドレス・住所等の変更届けはお忘れなく!**

**e-mailアドレス・住所などの変更がありましたらご連絡ください。**

**転居先不明で返送される例が増えています。**

**e-mail : mail@abic.or.jp FAX. 03-3435-5979**



昨年5月ABIC常務理事・事務局長を退任、三菱商事に帰任されるもABICを支援していたいっている宮内ABIC参与から上海便りが届きました。

## あれが東海大橋

私は今年3月27日に上海市へ赴任しました。過去北京に2回駐在し、上海には出張で數十回訪れていますが、駐在は初めてで新入社員のようなわくわくした気持ちでの出立でした。

飛行機が上海に近づくと、窓から見える海の広がりが緑色から、揚子江が遙か沖合まで流し込んだ泥の色で茶色へと変わっていきます。機体が高度を下げて大きく旋回し始めた時、陸地と海岸線が見えたと思った瞬間、ぎょっとするような真円形の池が海岸近くに建設されているのが目に飛び込んで来ました。

機体が重力を感じさせる程の力でさらに旋回を続けると、今度はとてつもなく長い橋が見えてきました。真下の海岸線からずーっと先端が見えなくなる遙かまで、建設中の橋げたが規則正しく何十と並び、一部には板を載せたように橋の上部が取り付けられ、あちこちにバージやクレーン船が群れるように作業をしています。これが「東海大橋」だ、もうこんなに建設が進んでいるんだ、と何か大発見をしたような気分で、思わず橋げたの最後が窓の視野から消えるまで顔をガラスに押し付けて眺め続けました。

上海の南は中国大陆に大きな楔を打ち込んだような形の杭州湾になっており、北側は対岸まで50kmになる揚子江の河口に接し、その結果上海は南北と東シナ海の水に囲まれた大きくぶ厚い嘴のよう<sup>くちばし</sup>な形になっているのですが、杭州湾に沿って対岸まで陸路を行くと大変遠回りになることから途中に大橋を建設する計画がある、と聞いていました。

そして東海大橋を150億元（約2,000億円）かけて建設する、とのニュースも見たことがあります。そんなことから、これが東海大橋だ、これで杭州湾を渡るんだ、と思わず興奮してしまった訳です。

ところが、これが全くの間違いだったのです。杭州湾を渡る橋は別の計画で、私が見たのは確かに東海大橋ではありますが、これは、上海のあの嘴型の先端にあたる場所から沖合い30kmに小洋山、大洋山と呼ばれる島があり、この島を掘削埋め立てて世界最大級のコンテナ港を建設し、そこまで渡って行くための橋であったのです。そして、橋の上海市側のたもと周辺には一大工業開発区、物流基地と住宅都市を建設しようとするもので、あの真円形の池は、水滴が池に落ち

みやうち ゆうじ  
宮内 雄史 ABIC参与（三菱商事（上海）有限公司）



建設中の東海大橋



て波紋が広がっていくイメージで、直径1.5kmの人口池を中心に同心円形の人口20万人の都市を作る計画であったのです。

日を変えて実際に建設中の現場まで行く機会があったのですが、東海大橋は片道3車線の幅で、橋のたもとに立つと、海がやや霞んでいたこともあり、並んだ橋げたと上部の板が遥か見えなくなるまで続いていました。真円の池は「滴水湖」と呼ばれ、浅瀬を浚渫し周囲を埋め立てたとのことで、まだ浚渫用パイプが至る所に積んでありました。あとは一面の掘り返した土の広がり。また、工業開発区には、上海フォルクスワーゲンの第2工場が建設されることになり、7月に杭打ち式も行われました。



上海フォルクスワーゲン工場  
鉄入れ式

そんな訳で、上海市内から1時間程で中国の巨大な建設ブームの一端を観察できる場所としてアレンジメニューに入れることにしました。

## 中小企業支援活動 —地方自治体への協力

地方自治体への協力は、既にたびたびご紹介しているが、これまで準備段階としていくつかの自治体との間で、打ち合わせしてきた話が、最近具体化しつつあるので、その一部をご紹介する。

構造改革の柱の一つとして、地方税制改革、地方自治の確立、および地方の活性化が叫ばれ、各自治体はこぞって産業の振興・育成、産業の誘致、物産販売の拡充等の方針を打ち出している。そのため、これら各分野に多くの知識、経験を有する人材をアドバイザーとして求める自治体が多くなってきていている。

### ●中小企業国際ビジネス支援

千葉県が進める国際ビジネス支援事業に対するABICの協力として、昨年に引き続き今年も、県内中小企業の海外展開を支援するための海外取引アドバイザー、同じく自社のホームページ、パンフレット等の英・仏・独語訳、中国進出のための実務支援あるいは社内講習会講師等に延べ10数名の会員が活躍している。

### ●国内外の企業誘致

地場産業の振興・育成・活性化を図るため、各自治体が造成した工業団地等への企業誘致も活発に行われている。

宮城県に引き続き、愛知県でも企業誘致アドバイザーとして2名の会員が採用され、商社勤務時代に培った経験、知見、人脈をフルに活用した活動により、企

業誘致の成果が期待されている。

### ●中小企業製品のマーケティング・物産の販路拡大支援

東京都が推進しているビジネスナビゲーター制度に続き、他の自治体でも同様の事業が進められている。

①埼玉県が選定した企業の製品を、主として首都圏で拡販するもので、手始めの一社に続き、第2弾の推進について折衝中である。中小企業の製品は、かなり特殊なものも多く、商社OBにとって不得手な分野、あるいは商品グループの範疇の選定が難しく、これまで取り扱った商品とかけ離れたものもあるが、採用された会員は積極的にチャレンジしている。

②宮城県が選定する県内企業製品の首都圏でのマーケティングで、食品ならびに情報通信関連の数社が選定される予定である。細目についてさらに打ち合わせのうえ、具体的な作業に入る。

③大分県が進める、大分県産品の輸出振興アドバイザーとして、1名の会員が活躍している。中国・華東地区に的を絞って同県産品の輸出体制を確立すべく、県内の関連企業等で構成されるワーキンググループに対するアドバイス、上海での物産販売展示会開催のための現地調査、準備、開催実施等を取り行うべく、鋭意奮闘中である。

個々の中小企業ならびに地方自治体から寄せられる人材推薦の要請は、今後ますます増加するものと考えられる。ABICとしてできるだけ多くの機会を会員各位にご提供できるよう、活動を広げていきたい。今後とも会員各位ご自身の経験、知見、人脈を生かすべく、積極的なご応募、ご参加をお願いしたい。

(中小企業支援担当コーディネーター 高廣 次郎)

## 技術とアイデアのF社の 中国業務を支援して

みなみ まさる  
**南 賢**（元 西日本貿易）

今年5月、野津事務局長から電話をいただき、千葉県中小企業支援を担当の篠田コーディネーターに会ったところ、中国への進出を検討するため機械メーカーF社が千葉県の国際化支援事業を活用してABICに業務支援を要請しているとの紹介を受けた。早速、千葉県の担当者に同行



願いF社を訪問、会社概況とともに中国に対する取り組みなどをお伺いし、業務支援を引き受けることになった。支援契約期間は9月末までの4ヵ月余り。

F社は油圧・空圧技術を駆使した各種制御機器の製作およびシステムの設計、開発をメインとする技術力と創意工夫（アイデア）のある企業で、ユーザーは大型設備メーカー、鉄鋼・非鉄金属メーカーなど。特許等の知的財産も自社独自開発のほか、ユーザーと共同開発したものも多いとのこと。数年来、産業の発展著しい中国との直接、間接の取引が増えつつあるため、長期的・安定的な取引に発展させる観点から中国人スタッフを雇用し、積極的に中国市場に打って出ることを検討してきた。

同社はかねてより取引のある東北地区ユーザーとの関係から、大連近辺で適切な現地の協力企業を得たいとの意向あり。まず、その意向に沿い大連と瀋陽の機械メーカーを対象に調査を開始することになった。日本着任前の同社中国人スタッフに現地作業を担当してもらい、20社近い企業をリストアップ、協力の可能性の打診と調査を行った。しかし、この作業を通じては、改革・開放が急速に進展する流れに乗り遅れた東北地区の多くの国営企業は対応が鈍く、要望に応えられる対象企業候補を絞り込めなかった。

そこで、F社と再協議し、大連近辺にこだわらず調査対象地域を広げ、協力企業を求めるにした。複数のルートを通じ、華北、華南、華東の沿海地区のメーカーと接触、対象企業候補として数社と交渉を持つことができるようになってきた。

一方、この作業と並行して通常の業務活動は日々進行しており、それらと直接関連する会社案内やパンフ

レットの中文翻訳、新商品紹介のCD-ROMの中国語版作成、JETROライブラリーなどへ出向いての関連資料収集などをこなしながら、F社としては初の国際入札案件への挑戦を側面的に支援することになり、7、8月は比較的多忙のうちに経過した。契約期限の9月になり、対象企業との交渉は一部進展し、委託加工案件の具体化交渉が鋭意進められている。まだ初期段階ではあるが、この作業を経て、近い将来パートナーとなる企業が決定されていくものと期待している。

この間、私の支援業務はF社の中国進出の検討についてだけでなく、日常の具体案件に対するアドバイスをはじめとして、中国向け資料作成や入札案件など多岐にわたった。その反面、契約期間中に中国進出の鍵となる協力企業の選定作業を終えることができなかつたことはいささか残念である。

最後に、調査等でご協力いただいた中国の友人、JETROの友人等にあらためて感謝したい。

## 在日外国大使館あれこれ

東京にある外国大使館の商務部には、本国の企業から日本企業との取引に関連して各種の支援要請や日本人業者の斡旋依頼などが来る。このため各大使館は日本人スタッフを抱えて対応しているが、仕事がオーバーフローしたときや経費節減目的でアウトソーシングするときには、ABICのビジネスサポート・サービスにも出番が回ってくるはずである。

とは言え、カナダ大使館の場合、本国の企業からそのような要請や依頼があっても応じない方針をとっている。その代わり、そのような業務を提供できる日本企業を選考の上、国際貿易省のウェブサイトに掲載して、カナダ企業が直接コンタクトできるよう便宜を図っている。ABICもそのサービス・プロバイダーの1社として載っているが、引き合いはほとんどない。

カリブ海のC国大使館は、ABICの擁するスペイン語通訳者に魅力を感じている。しかし残念なことに、慢性的予算不足のため、たとえ格安料金であっても有料サービスには手が出ない。やむを得ず、日本人スタッフが手分けして対応し何とか凌いでいるとのこと。

オーストリア大使館には大変お世話になっている。連絡なども的確かつスピーディーで、さすがはドイツ語圏の国である。先日、受付で待っていたら、アポイントの時間キッカリに担当者が現れ、「まだ会議中なので、



オーストリア大使館マリオン商務官との打ち合わせ

あと10分だけお待ちください」と言わされた。これでは、こっちも間違っても遅刻などできないことになる。

逆に、東アフリカのK国大使館は、先方からの要求で提出した見積書にもかかわらず、何ヵ月経ってもその結論が出ない。再三再四プッシュするのにも飽きて、「ファイルをクローズする」と宣言したら、「来年度の予算では何とか…」などと悠々としている。このような国と付き合うときは、「あせらず、あわてず、あてにせず、あきらめず」が常識だと聞き、直ちに納得。

余談だが、このような大使館に限って、今どきにしては珍しい楽園という側面がある。門番などはいないし玄関は出入り自由。受付をすり抜けて廊下に出るとすぐ執務室が並んでいて、開け放されたドア越しに中が丸見えである。これには、テロ犯も拍子抜けだろう。

この対極にあるのが米国大使館である。何台もの機

動隊の車両が警護するなか、厳重に閉ざされた正門の脇の通用門をくぐるとき、まず荷物を調べられる。本館では、身分証明書（運転免許証）と携帯電話を取り上げられたうえに金属探知機をくぐらされる。しかも迎えに出てきた面会相手の先導がなければ中には入れない。

ところでABICは、メコンデスク担当の吉川コーディネーターを通じて、タイ大使館とは非常に密接な関係にあり、何かとお世話になる一方、ABICもタイ国に対しいろいろと貢献している。ただ、これは通算25年間のタイ国駐在経験を誇る吉川氏なればこそその話であり、

このサクセス・ストーリーを簡単にコピーするわけにはいかない。多くの相手国はC国やK国のように、筆者が一度も足を踏み入れたことのない国だからである。

いずれにしても、世界は広い。そして、国もさまざまである。したがって、ABICにとってもさまざまな出番があるはずだと思いたい。

というわけで、外国大使館にコネをお持ちの方が、当該大使館でABICが対応可能なニーズを発見された場合には、ぜひsupport@abic.or.jp宛にご連絡いただきたい。

（外国企業支援担当コーディネーター　おおみち　とよひこ　大道 豊彦）

## 教育

### 大学・オープンカレッジでの講座

#### 外国為替講座雑感

さわだ　とよはる  
澤田 豊治（元 住友商事）



ABICに会員登録をして、まだ間もないころだった。ABICの大学講座担当コーディネーターの増田さんから電話をいただいた。早稲田大学エクステンション・センターで外国為替入門講座をやることになった。ついで「澤田さんにも参加してもらいたい」という話である。4人でやるオムニバス講座で、元丸紅の藤川一弘さん、元三菱商事の金井好弘さん、元日商岩井の日比野圭三さんが既に決まっていた。それにしても、なんで私などに声がかかったのか？

為替実務を経験したのは入社して10年ぐらいまでだ。管理職になってからは上から見ているだけだった。それも遠い昔の話である。人に教えられるようなしろものじゃない。増田さんにその間の事情を説明して丁重にお断りした。ところが、「海外主管者として為替と付き合ってきたでしょう。そういった立場からの話をやって下さい」の一点張り。非常に熱意ある人で、一度言い出したら聞かない性質の人らしい。30分ぐらいああだこうだとやり合っているうちに、気が付いたら、「考えてみましょう」と言わされていた。

引き受けてしまった以上あとには引けない。早速、紀伊国屋へ走って、外為と名の付く本を何冊か買い込んだ。職場の後輩を訪ねて話を聞いたりもした。昔懐かしい外為用語が何とか頭の中に戻ってきた。あ

とはどう講義するかだ。入門講座というものの、受講生のレベルがどの程度か全く分からぬ。自分なりにレベル1、2、3ぐらいに分けて準備するしかなかった。90分の講義に10倍ぐらいの準備時間を要した。

2002年4月15日が最初の講義だった。八丁堀にある早稲田大学エクステンション・センターへ行くと、30名弱の受講生が待っていた。現役の学生から、同年代のシニアに至るまでいろいろいたが、30代から40代のOLらしき女性が圧倒的に多かった。最初に「この講座を受講する動機は？」と質問を投げかけた。「外貨預金を始めたので、外為について勉強したい」、「為替を扱う部に配属されそうなので」、「商社の人の話に興味があったから」等々の答えが返ってきた。レベル1と判断して講義を始めた。経験談を織り交ぜながら、できるだけ硬くならないよう心がけた。高い授業料を払ってきた受講生だけあって熱心に耳を傾けている。あっという間の90分だった。初めての講座としてはまずまずの感じで、ほっとした。



8月16日  
早稲田エクステンション・センター  
〔副題〕「いま、外為が面白い」  
〔講師〕藤川一弘氏（元丸紅）

早稲田大学エクステンション・センターに続いて、明治大学リバティ・アカデミーから同じような講座依頼があり、やらせてもらうことになった。こちらも若者からシニアまで多彩な受講生が集まつてくる。受講態度も真剣だ。講師を見つめる若い女性のきらきら輝く瞳に気づいたことも一度や二度じゃない。

時勢のせいだろうか、外為への一般的関心の高さには驚かされる。専門的なことではなく、常識としての外為を知っておきたいということのようだ。お陰さまで2年半にわたって、早稲田と明治での講座が続いている。

藤川、金井、日比野各氏との4人組講師陣も変わらない。今では楽しく語り合える仲間だ。時にはジョッキを片手に、次はどういう工夫を入れようかと真面目な打ち合わせもやっている。最初はしつこい人だと思った増田さんだが、そのしつこさのお陰で、楽しい仲間に巡り合えたことを今では感謝している。

## 青山学院大学向け 「国際ビジネス関連講座」

—青山キャンパス講座と相模原キャンパス講座について—

青山学院大学では、国際政治経済学部を数年前から発足し国際的な人材養成を図っている。カリキュラムの中に実務的な知識の醸成のため、公官庁、金融業界、産業界の実務者による実務講座を開設しており、平成14年度後半にABICに対し、青山キャンパスにて「国際ビジネス」に関する講座開設の要請があった。早速、講座内容に関する打ち合わせを行い、平成15年度より3~4年生を対象としてABIC会員による「国際ビジネスと海外事情」講座を以下のように開設した。

平成15年度前期（春学期）は、商社活動を通じて体験した国際ビジネスの課題、駐在地での異文化交流の実情、さらには環境問題や安全保障に係るエネルギー・食料ビジネスを中心として7名の講師による12回の授業、後期（秋学期）はグローバル化時代に国際ビジネス環境の大きな変化に対応する新しい国際ビジネス・モデルについて8名の講師による12回の授業を行った。

実務体験をベースにした講師の授業は学生に評判も良く、大学側からも高い評価を受け、平成16年度も講座継続の依頼があった。講師の都合で一部交代もあったが、引き続き春学期12回、秋学期12回の授業を実施している。

さらに、同大学では平成16年度から新たに全学共通教育システム「青山スタンダード」<sup>(注)</sup>が新たに取り入れられたため、社会理解関連講座の一つとして、ABICに対し上記「国際ビジネス講座」につながるものとして1~2年生を対象とした「異文化交流・国際ビジネス入門講座」を相模原キャンパスでも開設する要請があった。大学側と打ち合わせの上、大きな変革を遂げつつある世界経済の動向を理解するための基礎的な知

識・理解を深めるための「入門講座」を開設することになった。平成16年度春学期はサブテーマを「各国経済事情」として、各地域の政治・経済・社会・歴史・文化などの基礎知識について9名の講師が13回の授業を行い、それぞれ日本・世界経済、北米、中南米、東南アジア、中国、欧州、中東、インド各市場について解説した。秋学期は、サブテーマを「国際ビジネス・モデル」として、9名の講師が13回の授業で第2次大戦後の国際ビジネスの変化に伴うビジネス・モデルの変化と日本経済の役割などの基礎的な問題をベースに、それぞれ世界貿易の変遷と総合商社の役割、繊維産業、食料問題、エネルギー資源投資と環境問題、ITとグロ



9月30日 青山学院大学  
「国際ビジネスの枠組について」  
講師：澤田豊治氏（元住友商事）

ーバリゼーション、生産拠点の海外シフトと分業体制（自動車産業、電気・電子産業）、ODAとNPO・NGO、今後の国際ビジネスの課題（WTOとFTAなど）について講義を行っている。

（注）学部・学科の枠を超えて、幅広い教養を育むための全学教育システム。

（大学講座担当コーディネーター 森 和重 もり かずしげ）

## 小中高校向け 講師派遣グループ便り

### 東京都の先生に対する研修会

一昨年、昨年に引き続き今年も、日本経団連が協力している教職員に対する夏季民間企業研修の一環として、東京都教育委員会依頼により研修先として商社を選択した東京都の先生方6名（公立の小学校、中学校の管理職候補のベテラン先生）をABICで受け入れ、8月11日ABICにおいて研修を実施した。

昨年に引き続き幹事会社は丸紅である。昨年は研修に来られた先生の多くに戸惑いが見られ、必ずしも実効を挙げたとは言い難かったので、今年はテーマを



「NPOにおける国際理解教育の実情、各学校における現状、問題点」とし、事前の先生方に対するアンケートにより、現場の実情、悩みを把握しておいたので、今回の研修は多大の効果があったと思う。

冒頭、野津事務局長よりABICの概要説明の後、大部分の時間を使ってわれわれ国際理解担当が実情、問題点、過去の実績などについて説明した。

多くの先生が熱心にメモを取り、また質問も幾つか出、最後に一人の先生から「この団体に属する会員の方の熱意と団体のエネルギーな活動に感心した」との感想の披瀝があったのは望外の感激であった。

今後の国際理解教育分野でのABICの活用を依頼し研修を終了した。

(小中高国際理解教育担当コーディネーター 細野良敦)

## ある留学生の 「国際理解教育の授業」から

今年度受け入れたインターン生はバングラデシュ出身の留学生（慶應義塾大学（湘南）総合政策学部2年）だったので、都内の小学校と中学校で「国際理解教育」の実習をしてもらった。留学生による授業はABIC会員の講義とはまた一味違うものであった。会員のご参考までに紹介する。

### 小学校のケース

その学校でABICが実施している「ハングルしか知らない韓国籍児童の日本語指導」を見学に行った際、先生からせっかくバングラデシュの留学生が来たので10分ほど話をしてほしいとの依頼で即興的に行つた。

①「バングラデシュという国名、ベンガル語を聞いたことがある人？」と質問。誰も挙手なし。

②彼女がベンガル語で「私の名前はシャムスン・ナハル、バングラデシュから来ました」と言って白板にベンガル文字で自分の名前を書く。子供達が一斉に驚きの声を上げる。見たこともない文字の存在、英

語以外の外国語があることを実感する瞬間である。

- ③「皆さんもベンガル語で名前を言ってみてください」とルビをふったカタカナの自分の名前の所を児童の名前に入れ替えさせ、「みんなに聞こえるように大きな声で。そう、とても上手です。皆拍手！」これを2、3人やるうちに教室の雰囲気はすっかり和やかになる。バングラデシュのことについて聞こうとする。
- ④「バングラデシュの首都はダッカです。今日から覚えてください」（これは使える！）。

⑤バングラデシュの小学4年生は何を勉強しているか、そして日本との違い、バングラデシュでは小学生から大学生まで詩の朗読を習うことなどを説明し、詩を朗読する。（何も意味は分からないが皆シーンとして聞き入る）

- ⑥「毎日国歌を授業が始まる前に歌います。では歌いますので皆さん立って下さい」（一同起立して、ナハルさんは大きな声で国歌を歌う。胸に手を当てて）。教室中にとても静かで神聖な空気が漂った。



### 中学校のケース

中学3年生120名を講堂に集めての講演。

- ①同じく詩の朗読を行うが、その前にバングラデシュの国歌の作者であり、アジアで初めてノーベル文学賞を受賞した著名な詩人タゴールのことを説明。
- ②バングラデシュの民族衣装を着せる。「誰かモデルになってくれませんか」と、生徒の中から男女一人ずつ選び壇上に上げる。「女性はサリーという1枚の布をまといます」。10メートルくらいの長方形布地を広げて見せる。先生の補助を得て着付けし、2人のバングラデシュ衣装姿の若者が誕生。「皆さん、よく似合っていますね、拍手しましょう！」
- ③国旗の意味

バングラデシュの国旗を見せながら、日本と同じ日の丸だが白地ではなく緑地に赤い丸である。この緑はバングラデシュの自然を意味し、中の赤丸はバン



グラデシュの西パキスタンからの独立闘争で300万人の犠牲者が流した血の色であると説明。(皆シンントする)

#### ④国名の意味

「バングラデシュのバングラはベンガル人とベンガル語、デシュは国の意味ですから、ベンガル人とベンガル語の国です。自国の言葉・文化の自由を持つて」ということは素晴らしいこと、私達は毎日授業前の朝礼で、国旗のもとに国歌を斉唱します。それを誇りに思います。皆さん立って下さい」。国歌を歌う。

(全員起立して聞く)

#### 雑感

一味違うところはどこか、留学生の語るバングラデシュは「南西アジアの一国」ではなくて、自分の国「祖国」であり祖国愛であった。ABIC講師も長年の任地をこよなく愛する方が多い。それは第二の「故郷」とも言うべき愛情である。外国人としてその国を好き

になることは素晴らしいことであり、その愛情は自然に生徒に伝わるものである。それをABIC講師の持ち味にすればよいと思った。

もう一つ違うところは、相手にする小学生や中学生と同年代の異国の子供が何を勉強し、どう遊ぶかというの、ABIC講師の題材にはあまり出てこないことがある。やむをえないことではあるが、子供たちには同年代の異国人の生活・遊びは非常に興味ある事柄なので、取り入れていただくとよい。そして日本と比較すれば鮮明に他国の姿を子供たちが認識できるのである。

また子供に外国語を発音させ「よくできました。皆で拍手！」と褒めると教場全体が乗ってくる。留学生によれば「留学生教育団体の事前の授業研修」の中で先輩から授かった智恵という。いい授業をするには内容だけでなく、教授法の技術的研鑽をすることが重要であることも再認識した。

(小中高国際理解教育担当コーディネーター 藤村 登)

兵庫県教育委員会から高校校長夏季研修会(7月30日)でのパネルディスカッション「日本の英語教育の今後の方向性について」のパネリスト派遣要請を受け、ABIC関西デスクで推薦した工楽氏から寄せられたレポートを紹介します。

### 真夏の熱い英語教育研修会

工 楽 誠之助 (元 松下電器産業)

兵庫県明石市は東経135度の子午線が通過する町として有名であるが、その北30km強に位置する社町もまたその経度上にある。古くは722年創建の佐保神社の門前町として栄え、明治時代には郡役所が置かれて以来、国・県の出先機関が設置され官公庁の町として開けていった。その社町にある兵庫県教育研修所が、今回の「日本の英語教育の今後の方向性」と題するパネルディスカッションの開催地である。

今年は観測史上初めてという暑いあつい夏であったが、会場いっぱいに埋め尽くされた200余人の県立高校の先生方は時宜を得たそのテーマに熱い関心を寄せられているのが、壇上のパネリストのわれわれに敏捷に伝わってくる感じであった。

当日の午前には、県教育委員会からの基調講演「本県の英語教育の動き」があり、午後一番には神戸大学沖原勝昭教授の「文科省の戦略構想と英語教員の自己研鑽」と題する記念講演があった。

続いて、「日本の英語教育の今後の方向性」というテーマでパネルディスカッションがスタートした。コーディネーターである沖原勝昭教授からイントロとして高校英語教育の現状総括があり、その後4人のパネリストが7分余の持ち時間でそれぞれの考えを発表した。終わり近くには、会場の先生方から現場のご苦労



や提案なども発表された。

そして、学習意欲をどう呼び起こすか、読解力・作文力 vs 実用英語、会話ができる英語、仕事・社会に役立つ英語、英語よりも話す中身（歴史、文化を理解したうえで）、テキストの選定は誰が何を基準に等々パネリスト間の活発なディスカッションが始まった。これらをより効果的に実現するために、教員の海外派遣や高校生の留学促進なども提案された。

コミュニケーションの手段である言葉は心の遣いでもある。また相互文化の理解のための言葉でもある。しかし、この最も重要な基本のところをないがしろにした今の日本の高校英語教育は入試のために準備されたカリキュラムで成り立っていると聞く。ところが大学入学後の英語の書物は入試のような難解なテキストを使用していないようだ。

拡大EUは2004年5月から25カ国となり、公用語も22

言語である。今、EUでは「ワンプラスツー」のアクションプランが展開されている。自国語にプラス2カ国の言葉を学ぼうとするキャンペーンである。

国際社会のあらゆる場面でより緊密な連携が期待されている日本は、より実用的な英語、社会生活の中で使える英語、自分を表現できる英語、議論できる英語の教育が待たれている。

パネリストの一人であるニュージーランドから来た元兵庫県の高校英語教員が、この会の終了後、私にそっと話してくれたことは現場の苛立ちを伝えている。「日本の英語教育は大学入試がその自由な展開を妨げている」。このテーマは長く度を重ね議論をしてきたが、その変化は遅々として進んでいない。このパネルディスカッションは高校教員対象でなく文部科学省を相手にすべきだったのかもしれない。

いました。

今回のバザーは、同館に居住する日本人学生RA (Resident Assistant: 留学生の支援、留学生との交流を目的として居住) 11名が準備の段階から手伝いに参加しました。当日は、ABICのコーディネーターは裏方に徹し、販売はすべてRAが担当し、RAからはバザーを通じて留学生との交流の機会ができた、売り子役も楽しかったとの感想がありました。今回は初めて屋外で開催ましたが、天候にも恵まれ、広いスペースを使用し交流の場としても有効でした。

## 留学生支援バザー実施

10月23日（土）、東京お台場の東京国際交流館にて新入館の留学生を対象に生活用品を中心としたバザーを実施しました。活動会員をはじめABIC支援委員会加盟商社現役社員等の皆さまから生活用品、衣料品等ダンボール箱85個をご提供いただき、留学生に販売し大変好評でした。売上金は、留学生支援活動資金として有効に活用させていただきます。ご協力ありがとうございます。

## 2004年日本英語交流連盟 大学対抗ディベート大会に参加

英語による国際交流を推進している「日本英語交流連盟」(ESUJ) 主催の恒例の大学対抗英語ディベート大会に、2002年からABIC会員の有志が協賛参加しています。今年も10月10、11日の両日、国立オリンピック記念青少年総合センターで開催されましたが、その予選会（11日）にchairpersonボランティア・スタッフとして、英語好きの次の4名の方々が参加され、主催者から高い評価を得ました。（敬称略）

漆崎隆司（元ニチメン）、長嶋昭美（元住友商事）、堀江 博（元住友商事）、村井靖武（元ニチメン）  
(留学生支援担当コーディネーター 山田 雅司)

前号（No.10）P.3の2004年度収支予算の数字に誤りがありましたので、お詫びして訂正いたします。

### 2004年度収支予算 (単位：千円)

科 目	予算額	前年度実績
I 収 入 の 部		
(1) 会 費 収 入	5,700	5,945
法 人 会 員	( 4,700)	( 5,000)
個 人 会 費	( 1,000)	( 945)
(2) 受 託 事 業 収 入	24,902	31,070
日本貿易会	(18,300)	(18,300)
そ の 他	( 6,602)	(12,770)
(3) 雜 収 入	300	121
前 期 繰 越 金	8,584	7,347
取 入 合 計	39,486	44,483
II 支 出 の 部		
(1) 一 般 管 理 費	2,000	1,778
(2) 受 託 事 業 費	28,804	33,039
(3) 器 具 備 品 等	0	1,082
支 出 合 計	30,804	35,899
次 期 繰 越 金	8,682	8,584

## 事務局だより

### ABIC懇親会開催

7月27日(火) 18時~19時半、浜松町の「メルパルク東京」にて懇親会を開催しました。佐々木会長をはじめABIC役員、活動会員および日本貿易会関係者150名参加。ABICの一層の発展を期し、会長ご挨拶のあと、

参加者一同なごやかに懇談しました。



### 2004年度非営利組織インターンシップ(学生実習生)受け入れ

2001年度からスタートした慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスからの学生実習生の受け入れは今回で4回目となります。今年度はTVドラマ「おしん」を見たのがきっかけで日本に留学したバングラデシュの女子留学生シャム・ナハルさん(総合政策学部2年生)を受け入れました。

8月末から約1ヶ月間、東京国際交流館の留学生支援活動と東京の中学校で講師としてバングラデシュについて講演するなど小中高国際理解教育の実習をしました(関連記事P.12参照)。また、ABICのほかネパールやバングラデシュに対する海外協力NPO等で活躍している会員の方々からもそれぞれの活動についてお話しいただき、NPOについて学んでもらいました。

### ABICインフォメーションレター発行費用支援および賛助会員登録ご協力依頼について

9月10日付吉田理事長名にて、ABIC活動会員の皆様に対し「会員各位へのお願い」として、インフォメーションレター発行費用支援および賛助会員の登録をお願いいたしました。

その結果、10月27日現在424名の方々からご返事をいただき、そのうち発行費用支援に賛同いただいた方が276名、新たな賛助会員については109名の方から登録のご連絡をいただきました。またABICの運営に関する貴重なご意見も多くいただきました。

ここに皆様に対し厚く御礼申し上げますとともに、今後とも皆様のご理解、ご協力をいただきながら一層のABIC活動範囲の拡大に努めて参る所存ですので、引き続き宜しくご支援いただきますようお願いいたします。

(事務局)

### 「高齢者雇用フェスタ2004」に出展、NHK教育テレビ「土曜フォーラム」に登場

10月4日(月)、東京ドームシティ・プリズムホールにて「高齢者雇用フェスタ2004」が開催されました。同フェスタは、独立

行政法人高齢・障害者雇用支援機構他の主催、厚生労働省、NHK後援によるもので、同機構からの要請があり出展したものです。ABIC専用ブースにおいて、来場者にABICの活動をPRしました。



同フェスタは、高年齢者雇用促進月間の中心行事のひとつとして開催されたもので、当日会場にて行われたNHK土曜フォーラム公開シンポジウム『団塊の世代は、どう生き、どう働くのか?』の中で、ABICの活動がビデオで紹介され、東京の事務所および横浜商業高校国際科1年生の教室での角井信行氏(元丸紅)による国際理解の授業の映像が放映されました。本シンポジウムは、10月31日のNHK教育テレビ「土曜フォーラム」にて放送されました。



## 新入会員のお知らせ

正会員（法人） 9月24日入会 長瀬産業株式会社  
 賛助会員（法人） 9月30日入会 キーリサーチネット株式会社

## 会員入会のお願い

国際社会貢献センターの運営費は、会員の皆様から頂く会費で賄われております。今後ともさらなる会員の皆様のご援助、ご協力をお願い申し上げます。

種類	内容	年会費		
正会員	センターの活動を推進する個人、法人及び団体。 (理事会の承認を得て入会。)	個人	一口	10,000円
		法人及び団体	一口	50,000円
賛助会員	センターの趣旨に賛同し、会費を納める個人、法人及び団体。	個人	一口	5,000円
		法人及び団体	一口	10,000円
活動会員	センターに登録し、センターの事業に参加しようとする個人。	不要	—	—

### 正会員

(2004年10月現在)

団体・法人(17社)	(社名五十音順)			
〈10口〉 (社) 日本貿易会	伊藤忠商事(株)	住友商事(株)	双日ホールディングス(株)	
丸紅(株)	三井物産(株)	三菱商事(株)		
〈6口〉 (株)トーメン	豊田通商(株)			
〈4口〉 (株)日立ハイテクノロジーズ				
〈2口〉 稲畑産業(株)	長瀬産業(株)	阪和興業(株)		
〈1口〉 協同木材貿易(株)	興和(株)	JFE商事ホールディングス(株)	蝶理(株)	
個人(4名)	(敬称略・氏名五十音順)			
池上久雄	小島順彦	寺島實郎	宮原賢次	

### 賛助会員

#### 法人

〈1口〉 キーリサーチネット(株)

個人(308名) 下記は本年7月以降ご登録、お申し込みいただいた131名の方 (敬称略・氏名五十音順)

〈2口〉 遠藤 寿一	久佐賀義光	高廣 次郎	牧村 恢臣	山本 忠彦	山本 寧雄		
〈1口〉 会川 精司	安達 晋	阿部 雅志	荒尾 紀倫	安藤 和夫	庵原 専三	一色 修二	
伊藤 輝雄	井口 義弘	宇田 定三	内田 康治	江藤 茂雄	榎本啓一郎	大塚 昭雄	大森日出太郎
岡部 紘	岡部 好夫	小國 輝雄	小畠 克之	小船井達夫	角井 信行	風間 誠	鹿島誠之助
加藤 克	金井 好弘	金子 康之	金子 義久	嘉根 俊治	川副 和之	川本 恒彦	辛島 洋
岸 達也	北川 寛治	木村 好作	久木田修司	鈴座 武敏	久保田堅一	隈元 泰弘	倉又 則夫
黒岡 誠一	古園井 良	小畠孝治郎	小林庄右エ門	小峯征三郎	齋藤 勝吉	酒井 満	坂本 俊寛
崎 貢	笛岡 治男	佐藤 一雄	佐藤 肇	佐藤 宏	佐藤 充宏	佐藤 隆二	敷島 健雄
島 悠紀夫	須賀直比古	関本 喜茂	曾我 典夫	醍醐 俊明	高木 俊彦	高木 裕昭	高崎 浩敏
高嶋 正文	高田 弘	高橋 洋	田中 昭彦	田中 剛	田中 則一	谷川 達夫	丹治 敬
淡野 武司	千葉 紘	塙谷 正彦	辻 萬亀雄	徳田 裕志	富島 紘一	中倉 弘紀	中込 喜雄
中島幸太郎	中島 正夫	中野 正義	永峰 千年	中山 文麿	西口 秦治	西山 慈恩	則満 洋祐
萩谷 敦	橋口 昭八	橋本 勝	橋本 裕一	林 常介	久澤 克己	平野 潤	平野 實
廣田 滋	廣田 幸男	藤村 登	北條 弘司	堀田 博	松浦 義則	松村 茂	松本 信司
三上佐橋	翠 政之	三栗 敏	南 正紀	南 賢	峯本 晴輝	宮崎 善嗣	宮田 修
村瀬 省三	村林 栄彦	森 健	森田 聰	森 達也	安田 佳苗	森内 晋	山口 健
萬木 寛	横井 正豊	横田 淑子	吉富 茂隆	李 荣	渡邊 晴郎		

ご入会は、当センターホームページ (<http://www.abic.or.jp>) 「会員入会案内」の申込書にご記入のうえ事務局宛郵送いただきますようお願い申し上げます。お問い合わせ先：Tel. 03-3435-5973 Fax. 03-3435-5979 扇、道家